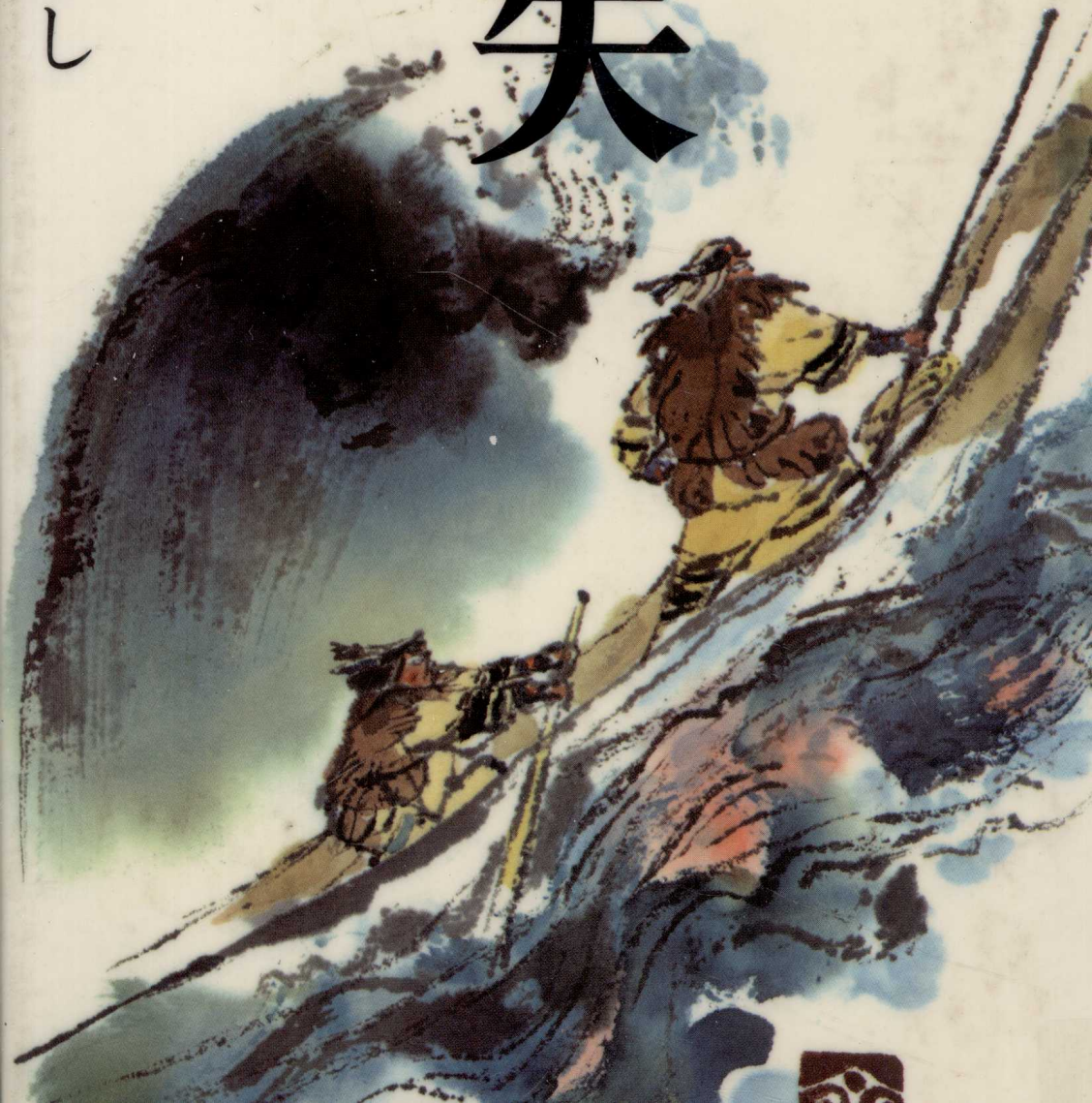


斎藤博之画

毒矢

川村たかし





913

川村たかし

毒 矢 川村たかし文 斎藤博之絵

国土社 1983

187p 21×15cm (現代の文学 1)

どく 矢 く現代の文学・1>

1983年12月15日初版1刷印刷

1983年12月25日初版1刷発行

著 者 川村たかし

発行者 長宗泰造

発行所 株式会社 国土社

〒112 東京都文京区目白台1-17-6

☎03(943)3721 振替 東京6-90631

印刷所 株式会社 厚徳社

©川村たかし／斎藤博之

毒矢

川村たかし・作
斎藤博之・絵



毒
矢／もくじ





毒

矢／もくじ

毒^{どく}

矢^や



「いまはもうこの噴火湾（はつかわん）（北海道・内浦湾（うちうらわん）のこと）にも、クジラはまったくこなくなつた。けれども、むかし、わしたちが沖（おき）で魚をついていたわかいころ、フンベ（クジラ）はときおりこのあたりまでまよいこんできたものじゃ。」

顔じゅう白いひげもじゃのエカシ（おき）は、水ばなをしごく。ならんですわった少年は、ひざをかかえ、思わずからだをのりだして、老人の小さい目をのぞきこんだ。

「フンベがとれるとな、浜（はま）では大さわぎよ。えもののそばにごさをしき、レブンモシカル（かみだ）をつくつて酒をそなえた。

「沖（おき）の神さま。フンベをおさずけくださつてありがとうございます。肉と油をいただいて、そのかわり幣（へい）と酒を、これこのとおりおそなえます。おそなえたのは、フンベの魂（たましい）をおくつてさしあげるための、みやげでございます。またどうぞフンベをおさずけください」

それからクジラにむかつては、

「よくわしらのところへお客としてたずねてくれた。このように祝つておくりますから、ぶじに家族のところへ帰り、またきておくれ」

そういつては頭に酒をそそぐ。クジラの頭は魂の宿るところじゃものな。

つぎにハシナウカムイにむかつて、

「なにごともなく、フンベの魂がいきつくようにお守りください」

と、いのるのじゃ。それというのも、ハシナウカムイが漁の神で、クジラの魂を守護しておくりとどける神だからだ。

そのあと、みんなは神がみをよろこばせるおどりをして式をおわる。」

エカシ(翁)はそのときのようすを思いだすように、うつとりと目をとじる。

しわだらけの顔をうずめるひげをなびかせて、海の風がふいた。海はいま、満ちてくるらしく、沖の岩礁のあたりを、白波がしきりに歩きまわる。青い布の海がゆたゆたとふくれて、崖下の荒磯はサアサアとひびきをたてていた。

午後のとりとした日のなかで、老人はしずかにほほえむ。ひとりごとのようなことばが、ぼそぼそとひげの中からこぼれた。

「いま、海はニシンもアキアジ(サケ)もかれた。魚どもは涙を見かぎり、遠くへさったそうな。それというのも、わしどもアイヌの守り神が、わしどもを見かぎったと

いうことじゃ。魚がこんのではない。人間どもが神をないがしろにしたせいで、神がみがいそづかしをしたものだぞ。見ろよ、ほれ、海はいまもむかしもかわりはなからう。沖おきのほうでは黒く、中ごろではもりあがつて青からう。イソではいまもむかしも海ははしやぎたてる。イソのかおりをぐるぐるぐるふりかざして、わらいさざめくものじゃ。」

老人はアツシのえりをかいつくろう。

少年はだまって、目の下で日にかがやく、すんで明るい海を見た。老人のいうように、どっしりとおもい海のかなた、沖おきはふきげんにしずまりかえっている。小舟こぶねがいくつか、海をなだめるように、点々とちらばっていた。

目の下を一そうの小舟こぶねが沖おきへ出ていく。男がひとり、ろをこいでいた。舟ふねがのりこえたあと、水はてらてらと光って、ふるいやけどのあとのようにひきつる。

少年は話のつづきをうながすように、老人を見た。

「そうじゃ、むかしはわしどもアイヌは、神がみとともにくらしておった。

まずマクンマサレコロカムイは、イソのちよつと上においになった。ちよつと下



にはサンケマサレコロカムイがおわした。漁に出るときは、この二神にまず酒をそなえる。舟のおりる波の上にいる神はカイベチュップアニカムイだが、この神にはぶじに舟がうかぶようにといのるのじゃ。

三番めはトマリコロカムイ、いうところの竜神さまじや。この目の前の噴火湾一帯をおさめる入り江の神で、漁のぶじをおねがいする。つぎには、外海の神——太平洋の神——シャトイバタカムイにいのる。そうして、おしまいにはカムイフンベ、つまりシャチの神にいのる。

「あなたの海の幸を、たくさんおさずけください」と、な。

カムイフンベがとくべつにいきましいことはきいておろう。巨大なクジラを海岸に追いあげては、われわれアイヌにとほうもない食糧をくれる。小さな魚どもを相手にたたかうのではない。自分はちびのくせに、クジラだけをねらって追ういきましきは、まこと、われわれアイヌのかがみだった。ただのシャチではない。生きた海の神、カムイフンベなのじゃ。こうして、わしどもは舟をうかべて漁に出た。いや、まてまて。いまひとつ舟の神にも酒をささげ、いのりをあげる。海に出てしまえば、その日の獵

は、まこと神のおぼしめし、み心なのだからな。」

老人は頭をさげ、はるかにつづく海を前にして、うたうようにいのった。少年も、自分がまるでこのエカシ（翁）と漁に出るかのように、ならんで頭をさげた。ふといまゆのあたり、少年はどこか老人とにっていた。ほそいしなやかなからだ、ちよつとまゐるようになった。

老人のからだにぴんと力がこもった。いのりのことばが、風をおさえて海のほうへおちていく。

舟底におわす神がみは

ニントムクシ彦

ニントムクシ姫

と、もうされる。

波切におわす神がみは

ニントエ彦

ニントエ姫

と、もうされる。

波受^{なうけ}におわす神がみは

カイキツクウン彦

カイキツクウン姫

と、もうされる。

かいごにおわす神がみは

ニンサマ彦

ニンサマ姫

と、もうされる。

ともにおわす神がみは

コテツクリキ彦

コテツクリキ姫

と、もうされる。

たかまにおわす神がみは

コキリリセ彦ひこ

コキリリセ姫ひめ

と、もうされる。

かじにおわす神がみは

コペノエ彦

コペノエ姫

と、もうされる。

あかくみにおわす神がみは

コペチヤリ彦

コペチヤリ姫

と、もうされる。

帆柱ほしらにおわす神がみは

コマウノエ彦